

日本都市計画学会

学会賞・功績賞・国際交流賞

2012 年年間優秀論文賞

受賞一覧ならびに授賞理由書

公益社団法人

日本都市計画学会

# 目 次

## 1. 学会賞

1) 受賞一覧 .....	1
2) 選考経過および各賞の対象内容 .....	2
3) 授賞理由	
(1) 論文奨励賞 .....	3

## 2. 功績賞・国際交流賞

1) 受賞一覧 .....	6
2) 選考経過および各賞の対象内容 .....	7
3) 授賞理由	
(1) 功績賞 .....	8
(2) 国際交流賞 .....	11

## 3. 2012 年年間優秀論文賞

1) 受賞一覧 .....	13
2) 選考経過および表彰対象 .....	14
3) 授賞理由 .....	15

## 日本都市計画学会 学会賞受賞者

(受賞者敬称略)

### <論文奨励賞>

熱帯島嶼パラオ共和国における流域圏を基礎とするランドスケープ・プランニングに関する研究  
東京大学大学院 飯田 晶子

タイにおける都市コミュニティ・ガバナンスの制度化に関する研究  
-バンコクのコミュニティ組織協議会の設立過程を事例として-  
横浜国立大学 柏崎 梢

都市圏フリンジ地域における空間構造と地域社会の変容に関する研究  
-インド・ムンバイ都市圏の都市・農村関係の形成過程に着目して-  
国際連合大学 金 昭希・ミンソン

公共交通機関の整備水準を考慮した人口密度と自動車利用との相互関係に関する研究  
公益財団法人鉄道総合技術研究所 鈴木 崇正

目的地選択モデルの開発とそれに基づく地の利・購買地分布・最適施設配置の解明  
東京理科大学 本間 健太郎

## 日本都市計画学会

### 学会賞 選考経過

2013 年（2012 年度対象）学会賞は、会員が推薦した石川賞候補 1 件、石川奨励賞 1 件、論文奨励賞候補 8 件、計 10 件が審査の対象となった。

表彰委員会（学会賞選考分科会・委員全 17 名）は各々の候補の業績について複数の担当審査委員が独立に査読および調査を実施し、各委員から提出された評価にもとづき、分科会で慎重に検討の結果、受賞候補を選定した。

特に評価の分かれた案件については委員会席上でその結果を照合、討論、協議し、分科会の最終審査結果とした。さらに分科会の審査結果を理事会に諮って、論文奨励賞 5 件の受賞が決定した。

---

### 各賞の対象内容

#### 論文奨励賞

都市計画に関する将来性・発展性が顕著な研究論文を最近（過去 1 年以内）発表した会員（個人）を対象とする。

論文奨励賞	
受賞者	飯田 晶子
作品名	熱帯島嶼パラオ共和国における流域圏を基礎とするランドスケープ・プランニングに関する研究
授賞理由	<p>本論文は、パラオ共和国バベルダオブ島を事例研究対象に、水循環や生態系の基礎的単位であり、熱帯島嶼の生活・文化と密接に関わる「流域圏」に着目し、階層的な空間スケールと歴史的な時間スケールから流域内のランドスケープの構造・機能・変化の体系的な解明を行い、熱帯島嶼の環境の持続的維持を目的とするランドスケープ・プランニングのあり方を考察したものである。全島を構成する 110 個、平均 3.47 km<sup>2</sup>の小流域を最小単位として設定し、これらを隈無く調査した点、そしてこれまで表に出ていなかった地図を発掘し、現地調査を通じて約 1 世紀に亘る事例島全域での土地被覆変化を解析するなどの環境空間情報データベースを構築する方法を確立している点であり、その成果として提唱されている流域協議会を中心とした多様な主体間の相互連携を元にした流域圏のランドスケープ・プランニングの方法論は、身近な地区から地域、そして国土へとシームレスに続く統合的な環境マネジメントへの可能性を示していると言える。以上により、本論文は論文奨励賞に値すると判断する。</p>

論文奨励賞	
受賞者	柏崎 梢
作品名	タイにおける都市コミュニティ・ガバナンスの制度化に関する研究 -バンコクのコミュニティ組織協議会の設立過程を事例として-
授賞理由	<p>本論文はタイのバンコクの全域を対象にコミュニティガバナンスという観点から 1000 を越える組織活動と全体像を扱っている力作である。筆者にしかないオリジナルのデータを構築していること、それが急速な都市発展と都市づくりでの参加型都市開発の仕組みづくりが必要となる発展途上国での取りくみをまとめていること、タイの都市づくりを表面的になぞるのではなく、フィールドの丁寧な調査を行っていることが特徴であり、今後のアジアの都市づくりに役立つという点でも高く評価できる。表面的なものをなぞる海外調査研究が多い中、その国の今後の都市計画立案の中で役立つ提案を行うには文化、歴史を知ることが必要で、そうしたバックグラウンドの理解が見受けられる点も評価できる。都市計画の実践を都市計画が必要とされる途上国で実践として使えるフィールド調査をしていることから、本研究は論文奨励賞に相応しいものとする。</p>

論文奨励賞	
受賞者	金 昭希・ミンソン
作品名	都市圏フリンジ地域における空間構造と地域社会の変容に関する研究 -インド・ムンバイ都市圏の都市・農村関係の形成過程に着目して-
授賞理由	本研究は、インド・ムンバイ都市圏を対象として、都市域とそのフリンジの農村的集落を多角的に分析しており、都市と農村間の交流を踏まえたバランスのとれた都市圏へ発展していく過程を捉えている。都市と農村間の機能連携の形成と強化の視点が強調されており、持続可能な都市圏の形成への可能性を示している。研究課題の遂行においては、インドの研究者・政策立案者とのネットワークから得られた情報に素早く対応し、現地研究機関に席を置きながら長期にわたり築き上げた住民との信頼関係をもとに適切かつ綿密な情報収集を行っている。豊富な途上国の調査活動の経験をもとにした情報収集・調査は適切かつ精緻であり、論文奨励賞の受賞に値する労作となっている。

論文奨励賞	
受賞者	鈴木 崇正
作品名	公共交通機関の整備水準を考慮した人口密度と自動車利用との相互関係に関する研究
授賞理由	本論文は、現代の都市交通計画の中心的テーマの一つである自動車利用適正化施策に着目し、その基礎となる人口密度と自動車利用との相互関係を再検証する中で鉄道など公共交通機関の整備水準の重要性を実証しようとした意欲的な論文である。特に優れている点として、1)世界 19 都市圏の PT データを用いた詳細分析により、人口密度と自動車利用との相互関係において都市鉄道を中心とする公共交通の整備水準が介在する可能性を指摘している点、2)人口密度、自動車利用水準等が異なる米国と日本を対象とした複数年データの分析により、鉄道整備が人口密度と自動車利用の相互関係における介在要因であることを実証している点、3)東京都市圏での交通行動調査データを用いて、人口密度以外の都市構造変数および個人属性変数を同時に考慮した混合モデル分析を行い、人口密度と自動車利用との相互関係を定量的に把握している点が挙げられる。豊富な文献レビューと膨大なデータ処理に基づく研究成果に加え、複数の課題も提示されるなど発展性も期待され、論文奨励賞として相応しいと判断した。

論文奨励賞	
受賞者	本間 健太郎
作品名	目的地選択モデルの開発とそれに基づく地の利・購買地分布・最適施設配置の解明
授賞理由	<p>本論文は、ハフ・モデルの妥当性を理論的見地から根本的に再吟味する意欲的研究である。選択に伴う誤差項がガンベル分布に従うという既存研究の仮定の代わりに、財の効用はロジスティック分布に従うという仮定から同一のハフ・モデルをより単純に導出している。また、テーラー展開など数学的結果を駆使しハフ・モデルから距離と規模との間に成り立つトレードオフ構造を数式化した。これらの結果は独自の視点でかつ精緻な数学でスマートに構築されており水準が高く、都市解析のこれまでの研究領域をより拡大したという意味でも高く評価できる。都市計画にかかわる学術の将来性・発展性の観点で優れており、論文奨励賞に相応しいと判断する。</p>

日本都市計画学会 功績賞・国際交流賞受賞者

(受賞者敬称略)

<功績賞>

青山 吉隆	京都大学名誉教授
伊豆原 浩二	愛知工業大学客員教授
大村 虔一	東北大学元教授

<国際交流賞>

倉田 直道	工学院大学教授
谷 明彦	金沢工業大学教授



## 日本都市計画学会

### 功績賞・国際交流賞 選考経過

2013年日本都市計画学会功績賞・国際交流賞は、理事会のもとに設置された表彰委員会（特別功労表彰選考分科会）が、理事・監事・会長アドバイザー会議メンバー各位から候補者の推薦を受け、選考分科会で慎重に検討した。さらに分科会の審査結果を理事会に諮って、功績賞3名、国際交流賞2名の受賞が決定した。

なお、各賞の対象の種類は以下の通りである。

---

#### 各賞の対象内容

##### 功績賞

長年にわたって、都市計画学の進歩、発展に寄与してきた者で、その貢献が、社会的、学問的に見て顕著な者を対象とする。

##### 国際交流賞

長年にわたって、都市計画の国際的交流に携わり、海外諸国との交流並びに啓発普及と人材育成に貢献した者（外国人・日本人）を対象とする。

**功績賞****受賞者** 青山 吉隆**授賞理由**

青山吉隆氏は、京都大学・徳島大学・広島工業大学において多年にわたり、都市計画に関する研究・教育に貢献をされた。この間、多数の研究論文・論説・著作を執筆されるとともに、わが国における土地政策および土地利用モデルに関する研究分野の開拓者の一人として、理論的基礎の構築から応用的なモデル開発に至る多くの秀れた研究を行われた。さらに都市計画への数理的アプローチを先駆的に進めた点でもその功績は著しい。都市アメニティを科学的に分析した研究も独自性に富み、歴史的文化財の経済的価値計測方法に関する研究等において工学的なアプローチと経済学的なアプローチを融合させた新たな研究分野を確立された。

教育面においては、長く都市計画関連の講義を担当されるとともに、都市計画の基本をわかりやすく解説した教科書として評価の高い書籍「都市地域計画」を編集された。この書籍は、国外においても高く評価され、中国語に翻訳されて同国において出版されている。また、多くの学部生・大学院生を指導し、わが国の都市計画を担う人材を多数育てられた。

実務に関わる業績としては、都市計画関連の審議会・委員会に数多く参画され、多くの社会貢献をされた。とりわけ、京都市都市計画審議会会長として、歴史都市京都におけるまちなみ保全と再生のための政策体系の確立と推進に中心的な役割を果たされた。

以上のように、青山氏は、教育・研究における実績において顕著な貢献をされており、日本都市計画学会功績賞を授与するものである。

**功績賞****受賞者** 伊豆原 浩二**授賞理由**

伊豆原浩二氏は、名古屋工業大学において、交通制御を中心に都市交通分野の教育研究に従事された後、株式会社日建設計において総合都市交通計画や地域整備計画関連の実務で活躍された。その後、財団法人豊田都市交通研究所にて地方都市の交通計画、都市施設整備計画に関わる調査研究業務等に携われ、名古屋産業大学において都市交通計画分野の教育研究に従事された。特に、多年に亘る民間企業での実務経験を活かし、研究者として都市交通環境整備に関する都市計画や土木計画分野の多数の研究論文等を執筆され、その功績は極めて大きい。

本会活動においては、中部支部幹事に就任し、幹事長・副支部長・支部長を歴任され、本部では評議員・理事・副会長も歴任され、本会の発展に大きく貢献された。

実務面においては、豊田市都市計画審議会会長をはじめ各種の調査検討委員会委員長、都市計画マスタープラン策定委員会委員等を歴任し、現在も愛知県あいちエコモビリティライフ推進協議会アドバイザー、名古屋市公共事業評価監視委員会委員他多くの市町村の地域公共交通会議、法定協議会の会長・委員長等を務めている。

以上のように、伊豆原氏は、都市計画分野の研究および実務面での都市計画行政の推進において顕著な貢献をされており、日本都市計画学会功績賞を授与するものである。

<b>功績賞</b>	
<b>受賞者</b>	<b>大村 虔一</b>
<b>授賞理由</b>	<p>大村氏は、東京大学大学院修了後、東京大学助手を務め、(株)都市計画設計研究所を設立された。その後東北大学大学院教授に就任し、宮城大学教授・副学長となり、宮城大学を退いた後は、宮城県教育委員会委員長を務めた。現在も仙台市・宮城県等のまちづくりに貢献しており、最近氏は育てた研究者らと震災復興の要職に就いて活動してきている。</p> <p>本会からは「初台淀橋街区建築事業における企画と計画・設計および事業マネジメント」に対し平成13年計画設計賞を受賞された。</p> <p>実務においては、都市デザインを日本に定着させるうえで大きな役割を果たし、幕張ベイタウンなどの優れた実例を実現され、NPO法人などの活動を通じてまちづくりや官民協調型都市デザインのマネジメントを実践されている。</p> <p>研究・教育活動としては、都市デザイン、都市の遊び場、道路空間などに関わる著作を著すとともに、実践的な都市デザイン実現に関わる研究論文を、官民協力再開発プロジェクトの総合的推進方策の研究などとしてまとめている。</p> <p>以上のように大村氏は、都市デザインおよびその総合的なマネジメントを日本に定着させるうえで多大の貢献をされており、日本都市計画学会功績賞を授与するものである。</p>

## 国際交流賞

受賞者 倉田 直道

### 授賞理由

倉田氏は、早稲田大学・カリフォルニア大学大学院を修了後、カリフォルニア大学都市地域開発研究所、HKS アソシエイツを経て、株式会社アーバン・ハウス都市建築研究所代表取締役および工学院大学教授として、都市計画研究に多大なる貢献をしてきた。とりわけ国際的な活動は数多く、都市計画研究および教育、実務において大きな影響を与えている。

本会における活動としては、1992年から2008年まで国際委員会委員として、国際都市計画シンポジウムの開催ならびに英文論文の審査等に尽力され、現在の国際都市計画シンポジウムの礎を築かれ、国際交流活動の中心を担ってこられた。「近代都市計画の百年とその未来」の出版に関しては、執筆だけでなく、翻訳監修者として国際的な都市計画資料集の作成に大きく貢献された。また、国際用語研究委員会の副主査として「都市計画国際用語辞典」の出版にも主導的に関わり、都市計画用語の日本語と英語の対応を精査して収録された辞典として高い評価を受けている。

実務に関わる業績では、都市プランナーとして国内外の数多くの都市開発に関わるマスタープラン策定等に加え、都市開発・都市計画やまちづくりの調査・研究、国際会議の企画運営に関わる総合コーディネータを務めており、理論と実践の両面から都市計画分野の発展に寄与されている。

教育においては、都市計画に関わる若手の専門家の育成と交流を目的に国際都市デザイン・ワークショップ等の日本側のアドバイザーとして、多くの日本の学生たちに参加の機会を提供し、貢献している。また、数多くの著作物を翻訳・出版されており、都市計画を学ぶ専門家はアメリカの都市計画を容易に理解できるようになった。

以上のように、倉田氏は、日本都市計画学会ならびに都市計画分野での国際貢献に、多大なる功績を果たしてきており、日本都市計画学会の国際交流賞にふさわしい人材と判断し、ここに日本都市計画学会国際交流賞を授与するものである。

## 国際交流賞

受賞者 谷 明彦

### 授賞理由

谷氏は、東京大学卒業後、清水建設（株）に務められ、建築設計部、地域開発部にて都市計画の実務に携われた。その間、ペンシルバニア大学大学院を修了され、修士号（都市・地域計画）および博士号（地域科学）を取得された。その後パーソンズ・ポリテック（株）、（株）創建人間環境研究所に移られ、1998年より金沢工業大学教授として、都市計画の研究及び教育に従事してきている。とりわけ国際的な活動に数多く参画されており、都市計画研究および教育、実務において多大なる貢献をしてきている。

本会における活動としては、1991年から2005年まで国際委員会委員・副委員長・委員長として、学会設立40周年記念国際セミナーの開催、国際都市計画シンポジウムの開催ならびに英文論文の審査等に尽力され、現在の国際都市計画シンポジウムの礎を築かれ、日本都市計画学会における国際交流活動の中心を担ってこられた。「近代都市計画の百年とその未来」の出版に関しては、執筆だけでなく、翻訳監修として国際的な都市計画資料集の作成に大きく貢献された。また、国際用語研究委員会主査として「都市計画国際用語辞典」の出版にも主導的に関わり、都市計画用語の日本語と英語の対応を精査して収録された辞典として高い評価を受けている。

実務を通じて国際貢献してきており、都市計画学会東京セミナー'91、日米大都市圏計画会議などではコーディネーターとして企画運営に携わり国際交流事業の発展に尽くしてきた。また、東ジャカルタ、イスタンブール、サイパンなどのマスタープラン策定にもかかわってきている。金沢工業大学に移ってからは、石川県、金沢市など地元自治体の審議会等の委員を務めると同時に、歴史都市金沢の街づくりを英文出版物として国際的に情報発信してきている。

以上のように、谷氏は、日本都市計画学会ならびに都市計画分野での国際的な活動において、多大なる貢献を果たしてきており、日本都市計画学会の国際交流賞にふさわしい人材と判断し、ここに日本都市計画学会国際交流賞を授与するものである。

# 日本都市計画学会 2012年 年間優秀論文賞受賞論文

(受賞者敬称略)

送迎バスとの代替性に着目した商業施設協力型路線バスの成立可能性に関する分析

- 埼玉県三郷市を中心的な事例として -

藤垣 洋平・高見 淳史・大森 宣暁・原田 昇

ドイツの都市計画における国際建築展(IBA)の役割と存在意義に関する研究

- IBAの歴史的発展と現代的位置づけに注目して -

太田 尚孝・Susanne Elfferding・大村 謙二郎・有田 智一・藤井 さやか

ワルシャワ歴史地区の復原とその継承に関する研究

- 文化財としての価値をめぐる戦後の議論に着目して -

鈴木 亮平・西村 幸夫・窪田 亜矢

英国における都市計画を通じたCO<sub>2</sub>排出量削減に関する一考察

- 分散型エネルギーネットワークと熱導管接続義務に着目して -

村木 美貴・菊地 啓

英国のコミュニティへの公共資産委譲(Asset Transfer)にみる市民主導型都市再生政策と取組

牧野 杏里

水害危険地域への土地利用規制導入効果検証への水害リスクカーブの適用

- 熊本市壺川地区の浸水域への土地利用規制導入効果の検証 -

柿本 竜治・山田 文彦・藤見 俊夫

緑地が持つ気温低減効果の評価に向けた緑地指標に関する研究

蛭田 有希・石川 幹子

歴史的景観キャラクタライゼーションに関する研究

- 鎌倉市中心部の寺社・道路・街区・水路・土地利用の歴史的景観特性アセスメント -

宮脇 勝

開発許可制度を緩和する区域の縮小に関する一考察 - 都市計画法第34条11号の条例で指定する区域を縮小した埼玉県下での取り組みを対象として -

松川 寿也・白戸 将吾・佐藤 雄哉・中出 文平・樋口 秀

京都市旧市街地型美観地区における基準の運用と景観形成課題

- 新築戸建て住宅の通り外観構成の実態調査より -

小浦 久子

低頻度な公共交通網を有する地域の移動利便性の評価手法に関する研究

- 時空間ネットワークを用いた公共交通網と都市構造の関連分析 -

赤星 健太郎・高松 瑞代・田口 東・石井 儀光・小坂 知義

## 日本都市計画学会

### 2012年 年間優秀論文賞 選考経過

日本都市計画学会では、当該年に発表された発表会論文及び一般研究論文に限定して、優れた内容の論文を表彰するための枠組みとして、「年間優秀論文賞」を新たに設置した。これは、学術委員会が当該年の1月から12月に発表された発表会論文及び一般研究論文の中から優れた内容を有する論文を選考・推薦し、理事会に諮り決定し、表彰するものである。

2012年は、発表会論文152編・一般研究論文20編、計172編を対象とし、学術委員会内に年間優秀論文賞選考ワーキンググループを設置し、慎重に検討の結果、授賞候補を選定した。さらに候補選定結果を理事会に諮って、11編の授賞が決定した。

---

### 表彰対象

1. 表彰対象

論文

2. 表彰のための選考対象となる論文

表彰当該年の1月から12月に発表された発表会論文及び一般研究論文 全編



<b>論文名</b>	送迎バスとの代替性に着目した商業施設協力型路線バスの成立可能性に関する分析 - 埼玉県三郷市を中心的な事例として -
<b>著者</b>	藤垣 洋平・高見 淳史・大森 宣暁・原田 昇
<b>授賞理由</b>	本研究は、埼玉県三郷市において商業施設が路線バス運行に協力した事例について、主体別の損益を分析し、市による調整が有効に機能したことを明らかにしたものである。評価できる点としては、第一に、バスに協力する商業施設の利益と費用を整理し、三郷市を事例に、商業施設側にもメリットがある可能性が高いことを、定量的に評価したことが挙げられる。第二に、商業施設の協力が無い場合には、現状のサービスは採算がとれないこと、周辺住宅地からの利用が大きく減ることを示している。このような形式での路線バス運行計画に大変有益な研究である。以上により、本研究は年間優秀論文賞にふさわしいと判断する。

<b>論文名</b>	ドイツの都市計画における国際建築展(IBA)の役割と存在意義に関する研究 - IBA の歴史的発展と現代的位置づけに注目して -
<b>著者</b>	太田 尚孝・Susanne Elfferding・大村 謙二郎・有田 智一・藤井 さやか
<b>授賞理由</b>	本研究は、ドイツにおいて 100 年以上の歴史をもつ国際建築展 (IBA) について、その社会的役割の変化を歴史的に明らかにし、更にハンブルグの事例から現代における存在意義を論じたものである。評価される点は、第一に、これまでわが国では明らかでなかった IBA について、既往研究の精細な調査によって歴史的変化の整理を行い、これにもとづき現地での担当者らへの周到なヒアリングを行うことで、独自の知見を獲得している点である。第二に、IBA の現代における存在意義とは、都市計画の社会実験としての性格にある。IBA は時限的存在であり、時代状況に応じ、ドイツ国内各地の固有性に即した計画論を提案しえた。以上のように、本論文は、ドイツおよびわが国の都市計画にも参考となる点で、年間優秀論文賞にふさわしい内容を有している。

<b>論文名</b>	ワルシャワ歴史地区の復原とその継承に関する研究 - 文化財としての価値をめぐる戦後の議論に着目して -
<b>著者</b>	鈴木 亮平・西村 幸夫・窪田 亜矢
<b>授賞理由</b>	本研究は、これまで端的な歴史的事実としてのみ知られてきた、第二次大戦後のワルシャワ歴史地区の復原を対象に、その現代にいたるまでの継承の過程を考察したものである。評価されるのは、戦後から現代に向け、記憶とアイデンティティの追及としての復原から、ユネスコに認知された世界文化遺産の保全といった形で、質的に変化していった住民の意志を議論の俎上に上げ研究対象とし、様々な視点から論証を試みるという、チャレンジ性である。本稿では、担当当局、ディベロッパー、そして一般住民らの意志が、国際情勢を背景にいかなる変化をとげながら継承されていったかが、既往研究の網羅とヒアリング調査から明らかにされており、新しい型の知見を提示したといえる。よって、本稿は年間優秀論文賞にふさわしい内容を有している。

<b>論文名</b>	英国における都市計画を通じた CO <sub>2</sub> 排出量削減に関する一考察 - 分散型エネルギーネットワークと熱導管接続義務に着目して -
<b>著者</b>	村木 美貴・菊地 啓
<b>授賞理由</b>	本論文は、都市計画的手段で CO <sub>2</sub> 排出量を削減する方策について、先行する英国の制度の実態を綿密な文献調査を通じて明らかにしようとしている。評価できる点としては、国、広域都市圏、自治体のそれぞれのレベルの関連計画書を網羅的、丹念にレビューし、3 つの施策間の重みづけと順序を整理した点があげられる。これらの分析結果が個別の自治体の施策の特徴を完全に説明できているわけではないが、今後より詳細なヒアリング等を行う際、対象自治体を選定するための参照枠として有用であると考えられる。

<b>論文名</b>	英国のコミュニティへの公共資産委譲(Asset Transfer)にみる市民主導型都市再生政策と取組
<b>著者</b>	牧野 杏里
<b>授賞理由</b>	本論文は、イギリス現連立政権が進める市民への権利委譲の一環としての、アセット・トランスファーに関する最新の動向と課題に関する論文である。評価できる点としては、第一に文献調査とヒアリングによりその政策背景から体制、活動成果・課題までを明らかにした点である。第二にそれらを有効に運営せしめている対策を明らかにし、日本への適用も含めて考察を行っている点である。

<b>論文名</b>	水害危険地域への土地利用規制導入効果検証への水害リスクカーブの適用 - 熊本市壺川地区の浸水域への土地利用規制導入効果の検証 -
<b>著者</b>	柿本 竜治・山田 文彦・藤見 俊夫
<b>授賞理由</b>	本論文は、水害リスクカーブを用いて低頻度大被害リスクを考慮し、水害時の浸水域での河川整備や土地利用規制導入の効果を実証的に検証した研究である。評価できる点としては、まず第一に、研究対象地域で建設された遊水池の効果を水害リスクカーブにより検証し、結果として治水整備が低頻度大被害リスクを高めていることを明らかにした点があげられる。第二に、水害リスクカーブを用いることによって、低頻度大被害リスクの存在や、ハードな河川整備効果や土地利用規制導入効果を視覚的に整理できることを実証し、水害リスクカーブが流域管理的治水政策の有効な評価ツールとなり得ることを示した点があげられる。

<b>論文名</b>	緑地が持つ気温低減効果の評価に向けた緑地指標に関する研究
<b>著者</b>	蛭田 有希・石川 幹子
<b>授賞理由</b>	本論文は、都市部の気温変化に対する説明力の高い緑地指標を明らかにすることで、都市の温熱環境の改善に向けた基礎的な知見を得ようとするものである。評価できる点としては、第一に、都内に常設された観測施設群の周辺環境の違いに着目した研究方法の独自性があげられる。第二に、1 年間の実測値を用いた丁寧な分析に基づく結論の信頼性があげられる。

<b>論文名</b>	歴史的景観キャラクタライゼーションに関する研究 - 鎌倉市中心部の寺社・道路・街区・水路・土地利用の歴史的景観特性アセスメント -
<b>著者</b>	宮脇 勝
<b>授賞理由</b>	本論文は、鎌倉市中心部において「エリア」としての歴史的価値を地図等の資料から丹念に明らかにし、過去からの変化の少ない歴史的街区が歴史的景観を形成するという前提から、歴史的景観キャラクタライゼーションという手法を確立しようと試みている。文化財を「点」として評価するのは来歴から易しいが、一定の範囲全体を街区ごとにどの時点で変化したのかを探り、継続性の有無を検証する本手法は、エリアの価値を判断するうえで大変有用な示唆を含んでいる。

<b>論文名</b>	開発許可制度を緩和する区域の縮小に関する一考察 - 都市計画法第 34 条 11 号の条例で指定する区域を縮小した埼玉県下での取り組みを対象として -
<b>著者</b>	松川 寿也・白戸 将吾・佐藤 雄哉・中出 文平・樋口 秀
<b>授賞理由</b>	本論文は、埼玉県下を対象に、都市計画法第 34 条 11 号にもとづく条例で開発許可制度を緩和する区域を縮小する際の課題を明らかにした論文である。評価できる点としては、県下各都市の 3411 区域指定、区域縮小の実態を詳細に調査し、それを分類・整理し、一旦緩和した規制を強化することには限界があることを指摘している。また、災害リスクの高い区域の即地的排除の提案をしている。これらの知見は、これから区域縮小を図る自治体のみならず、新たに区域指定をしようとする自治体にも有用な示唆を得ている点があげられる。

<b>論文名</b>	京都市旧市街地型美観地区における基準の運用と景観形成課題 - 新築戸建て住宅の通り外観構成の実態調査より -
<b>著者</b>	小浦 久子
<b>授賞理由</b>	本研究は、京都市旧市街地型美観地区における新築戸建て住宅を対象として、通り外観の実態を分析し、景観地区の運用と市街地景観の整備課題を明らかにしたものである。これまで、既成市街地でのマンション建設にかかわる景観上の課題については夙に指摘されてきたところであるが、本研究は建物変化の大半を占め、市街地景観の地色を変えてゆく戸建て住宅に着目し、景観地区として定められた形態意匠基準への適合性の観点から、いわば「戸建て紛争」の潜在的可能性の実態と課題を浮き彫りにしたところに有用性を認めることができ、年間優秀論文賞にふさわしい知見を提供したものと評価できる。

<b>論文名</b>	低頻度な公共交通網を有する地域の移動利便性の評価手法に関する研究 - 時空間ネットワークを用いた公共交通網と都市構造の関連分析 -
<b>著者</b>	赤星 健太郎・高松 瑞代・田口 東・石井 儀光・小坂 知義
<b>授賞理由</b>	本論文は、1 日あたりの片道運航本数が 10 本程度という低頻度な公共交通網を対象として、即地的な公共交通網の利便性を評価する手法を提案した研究論文である。鉄道やバスといった公共交通の時刻表を再現した時空間ネットワークを構築することで、今まで困難であった低頻度の公共交通網を有する地域の移動利便性の評価を試みている点が評価できる。また、提案手法を用いてケーススタディーを行い、人口減少が進む低密度な地域の公共交通網において利便性を向上できる可能性を示すなど、有用な示唆を得ている点が評価できる。